

## 序章

### 第1章 音と空間の表現

音空間 (Sound Scape) と知性

音空間を介したコミュニケーションの方法

音空間における可能性

### 第2章 視空間能力と聴空間能力の境界

視空間能力と聴空間能力の関係

共感覚

リテラシー

### 第3章 日本の美意識

日本画博士課程修了後のテーマ

日本画科

空間の概念

### 第4章 MICA での制作

アートに対する考え方

作品

今後の作品

結論

参考文献

謝辞

## 序章

私の作品は、障がい者と定型発達者、特に聴覚障がい者と聴者との間のコミュニケーションの境界と限界、そしてギャラリーの空間において木や石といった自然素材が音響のテクノロジーや言語とどのように相互作用するかを探求している。私は2012年12月から右耳に人工内耳を装着しており、その結果、音・色彩・言語の独特な関係性を作品の中で表現できるようになった。その問いは、どうすれば私はコミュニケーションの限界を乗り越え、観客とつながることができるだろうか？聴覚の限界や境界線を越えてもなお、音を通して普遍的な音楽を創り出せるのだろうか？

理論的には、関係性美学（Relational Aesthetic、リレーショナルアート）では、鑑賞者が参加することを求め、その作品の意味は参加者の行動によって決定される。例えば、リクリット・ティラヴァニは来場者にタイのカレーを提供し、その結果生まれたコミュニケーションがその作品の主要な特徴となった。一方、ティノ・セーガルは、ジェスチャーや人生経験がもたらす社会的な機微に焦点を当てたが、同時に私もメリーランド・インスティテュート・カレッジ・オブ・アート（MICA）でそういった手法を見つけることに取り組んできた。私は音・振動・言葉を用いて、3つの問いを投げかけている。人々はどのようにコミュニケーションをとるだろうか？人々はどのようにしてコミュニケーションの障壁を認識するのか？人々はどのように効果的なコミュニケーション空間とシステムを作り出せるのか？MICAで学んだことは、人々が違いを乗り越え、相互理解へと導くための実験的な音楽の価値である。

人工内耳の補聴器は、独自の音による新たな表現を生み出すことを可能にした。私自身の音の知覚は、一般的な音と記号の概念とは異なる。この点において、ジョン・ケージの著書である「沈黙」では、音と沈黙に関する革新的な視点と、特に彼による禅の原理やチャンスオペレーション（偶然性）を通して、コミュニケーションにおける新しい視点もたらしたことは極めて有益であった。

私は音楽によって共感を作り出すことにより、人々を繋ぐ方法を見つけることを望んでいる。iPhone、スピーカー、アンプ、レコーダー、そしてノイズアプリを使い、空間において不協和音と音楽的な共感の両方を生み出す配置をした。作

品に言語を用いることに関しては、観客とのコミュニケーションを取ることを可能にし、これまで聞いたことのない音を通して、異なる視点について考えさせることができる。さらに、作品に視覚と聴覚の制限や障壁を設けることで、観客は境界とは何によって定義されているものなのか？壁とは何によって成立しているものなのか？を考えすることができる。最終的には、新しいテクノロジーを組み合わせ、将来的にはインスタレーションをインタラクティブなアートプロジェクトへと発展させ、観客を巻き込んでいきたいと考えている。アートは普遍的な言語であり、人間のコミュニケーションの1つの形態である。究極的には、誰もが理解できる言語で明確に、そして効果的にコミュニケーションするという私の芸術的目標を達成することを望んでいる。

同時に、私は音と空間に深く結びついた文化を持つ日本で生まれ育ったということも重要だ。このことは、私の作品にも同様に深い影響を与えている。例えば、部屋を掃除するときは、物だけでなく、何もない空間にも目を向ける。そのため、絵を描く時には常に余白も重要になる。日本の伝統文化において「余白・間・空」という空白の空間の概念は、一種の曖昧さと「境界のなさ」を表しており、その概念が境界の喪失によって人々を結びつけるという私の新しい作品に影響を与えている。「余白・間・空」とは、高次の精神、無、あるいは絶えず変化していく無の世界、生死の区別のない霞んだ状態を意味する。境界が解き放たれたかのような余白を表現する日本画の霞んだ空間も、同じように何か音を通して探求したい。

第1章の「音と空間」では、上記の3つの問いについて考察する。第2章では、「視空間能力 (visuospatial ability) と聴空間能力 (audio-spatial ability) の境界」を考察する。第3章では、日本の美意識と空間が私の作品に与えた影響について説明する。最後に、第4章では、MICA で制作した最新作を見直し、分析する。